

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク⑬

堤 康徳

去る12月4日、上智大学創立100周年記念事業の一環として、四ツ谷キャンパス中央図書館にて、「イタリアのよしもとばなな——日伊交流：日本とイタリアの文学の世界」と題された鼎談が行われた。出席者は、作家のよしもとばなな氏、イタリア文化会館館長でナポリ東洋大学教授のジョルジョ・アミラーノ氏、それに私の3人。日本文学研究者アミラーノ氏は、よしもとばなな、村上春樹の翻訳者として知られる。

200人以上の聴衆が来場し、予想以上の盛会となった。私や会場からの質問に、よしもとさんもジョルジョも気さくに答えてくれて、鼎談は終始なごやかな雰囲気で行われた。

2009年度から上智大学で非常勤講師としてイタリア語を教える私に、理事の先生から、創立記念事業として、イタリア関連の催しを何か開けないかと打診があったのは5月のことだった。2013年は、ボッカッチョ生誕700年、マキャヴェッリの『君主論』執筆から500年、ヴェルディ生誕200年にあたり、その関連のシンポジウムやオペラ公演がイタリア国内外でたびたび開かれたようである。しかし、私がすぐに思いついたのは、ちょうど数ヶ月前にイタリア文化会館館長として東京に赴任したジョルジョの協力を仰ぎ、翻訳をめぐる講演会を開くことだった。それは、20年ほど前の公開討議が私の念頭にあったからだ。ジョルジョと私は、ふたりともまだ学生の時、1982年にナポリで知り合った。彼の学ぶナポリ東洋大学に私が留学したときのことだ。それから10年以上の歳月が過ぎ、私たちは東京で再会した。彼はこの時期に上智

大学に通い、須賀敦子さんの教えを受けていた。

ちょうどその頃、1994年10月だった。東京のイタリア文化会館で、「日本とイタリアの現代文学——相互間の理解はあるのか」と題されたパネルディスカッションが開かれ、翻訳をめぐる諸問題についての討議が行われたのは。パネリストは、須賀敦子、ジョルジョ・アミラーノ、岡本太郎の3氏と私。イタリア文学者で上智大学教授の須賀敦子の文名は、1990年の『ミラノ霧の風景』の刊行とともに、ますます高まりつつあった。須賀さんは、タブッキやナタリア・ギンズブルグのすぐれた翻訳者でもあった。ジョルジョが翻訳出版したよしもとばななの『キッチン』と、村上春樹の『ノルウェイの森』は、イタリアでも多くの読者を獲得していた。

岡本太郎と私も当時、イタリア現代文学の翻訳を始めたばかりだった。1993年から翌年にかけて、「新世代のイタリア文学」と銘打たれた6巻の叢書が東京書籍から刊行されたが、私たちはその翻訳者だった。叢書の推薦文を書いてくださったのは、作家の辻邦生氏と須賀さんである。

このときの公開討議の内容は、もうほとんど記憶に残っていない。自らの発言で思い出すのは、マンドラーゴラのことだ。マキャヴェッリの戯曲のタイトルでもあるマンドラーゴラは、古来、薬草として、あるいは媚薬として用いられてきたが、旧約聖書『創世記』第30章でも、受胎効果のある植物として言及されており、新共同訳では「恋なすび」と訳されている。それがナス科であることを考えればこれは名訳ではないか。世界で聖書ほど多くの言語に訳された書物はなく、翻訳という営み自

体も、西洋では、旧約聖書がヘブライ語からギリシャ語に翻訳されたときに始まったのではないか。こんな話をしたおぼえがある。

ジョルジョの発言で今も思い出されるのは、イタリアでは日本以上に翻訳者が疎んぜられていて、表紙に訳者の名前すら出ないということだった。

それにしても、このときは、ジョルジョがいずれ文化会館の館長になるとは夢にも思っていなかった。

今回の鼎談(たまたま鼎談という形式になったが)を企画するさい、ジョルジョに頼んだのは、彼の訳した日本の作家を呼んでもらえないかということだった。彼はこれまでに、中島敦、川端康成、宮沢賢治、井上靖などの作品をイタリア語に訳しているが、そのなかで現存する作家は、村上春樹とよしもとばなのふたりだけという。そこで、毎年ともに旅行をするほど親交の深いよしもとさんに声をかけてもらうことになった。幸い、よしもとさんも私たちの要請を快く引き受けてくださった。

鼎談のテーマは翻訳そのものではなかったが、世界じゅうに読者のいる作家とそのイタリア語翻訳者の生の声が聞けて、とても有意義だった。また、私たちが直接的、間接的に教えを受けた須賀敦子さんを、かつて教鞭をとられた大学で追悼する機会にもなったと思う。

イタリアは、よしもとさんとながりの深い国である。日本以外ではイタリアで、最も多くのよしもと作品が出版されている。『キッチン』は、少なくとも欧米では、どの国よりも先にイタリアで紹介された。英訳よりも先に、ジョルジョ訳によるイタリア語版が1991年に出版されたのだ(原書は1987年刊)。『キッチン』のあと、次々と彼女の作品が紹介され、数多くのイタリアの文学賞を受賞した。たとえば、『N.P.』は、1993年のスカンノ賞を受賞している。スカンノはイタリア南部の小さな町だ(アブルッツォ州ラクイラ県)。くしくも、その翌年にスカンノ賞を受賞したのは、アントニオ・タブッキの『供述によるとペレイラは』だった。この小説は、須賀さんが訳し、1996年に白水社から出版されている。

また、よしもとさんは何度もイタリアを訪れており、作品のなかにイタリアへの言及が随所に見ら

れる。一例を挙げよう。4部作『王国』には、目の不自由な楓という占い師が登場するが、彼がポンペイを訪れたとき、溶岩で埋まる直前までの人々の生活が生き生きと透視できたと語る場面がある。私はそこで、鼎談のさいに、よしもとさんにポンペイの印象を聞いてみた。彼女自身、これまでに2度訪れたことがあり、楓と同じように、いにしえの人々の生活が目に見えこんできたのだという。



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

上智大学創立100周年記念事業
＜鼎談＞

イタリアの よしもとばなな

— 日伊交流：日本とイタリアの文学の世界 —

日 12月4日(水)17:00～18:30

※ 上智大学 四谷キャンパス 中央図書館921室

出演者・よしもとばなな氏(作家)
・ジョルジョ・アマミトラノ氏(イタリア文化会館館長、ナポリ海洋大学教授)よしもとばなな、村上春樹翻訳者
・堀藤敦子氏(本邦イタリア語翻訳)リエーコ、ム、タブッキなどのイタリア文学翻訳者

趣旨
イタリアと日本の文化交流には文学が大切な役割を果たしています。イタリアでも著名な作家よしもとばなな氏も、翻訳者ジョルジョ・アマミトラノ氏とイタリア文学翻訳会(協賛)とともに活動を行っていますが、彼女が活躍するイタリアの文化や生活についてお話しいただきます。質疑応答もお待ちしております。

主催 上智大学100周年記念事業委員会 上智大学国際
共賛 上智大学文学部、上智大学史学会、上智大学ヨーロッパ研究所

協賛 イタリア大使館 イタリア文化会館

入場無料
予約不要
使用言語 日本語
対象 本学学生、教職員
※学生の出席希望の方は大学ホームページの案内サイトを印刷して中央図書館の入口で事務局に提出してください。

連絡先 学校法人上智大学 総務部 国際交流推進課 図書室
第100周年記念事業推進委員会事務局
102-8554 東京都千代田区四谷神田1番1号
TEL 03-3282-3161(直通)
E-Mail 100n_anniv@ic.sophia.ac.jp
ホームページ http://www.sophia.ac.jp/



鼎談の準備のために、私はよしもとさんの主要作品と、ジョルジョの書いた『ばななよしもとの世界』という本を読んだ。ここには、よしもとさんへの2本のインタビューと、ジョルジョのよしもとばなな論が収録されている。この本には、『キッチン』を読むようにジョルジョに勧めたのが須賀敦子だったと書かれている(Giorgio Amitrano, *Il mondo di Banana Yoshimoto*, 2007, Feltrinelli, p. 29)。ジョルジョは、鼎談でもこのことに触れていた。

彼は、『キッチン』を初めて読んだときの印象を、*Banana-Light* と題された論考のなかで次のように書いている。

『キッチン』を最初に読んだとき、その文体の稀有な自然さに最も驚かされたことをおぼえている。最初の頁から最後まで、まるで、なんの躊躇もなければ再考の余地もないかのように書かれていた。カルヴィーノが『アメリカ講義』で推奨した軽さ、

彼自身、ほとんど禁欲的な鍛錬によって身につけた軽さが、まだ若いこの女性作家によって軽々と獲得されていたのだ。まるで天から降ってきた贈り物を、気後れせず自然のごとく受け取ったかのようだった(ibid., p. 59)。

「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う」。たしかに、『キッチン』のこの書き出しは、一気に読者を引きこむみごとな一文だ。ジョルジョのイタリア語訳は、Non c'è al mondo che io ami più della cucinaである。鼎談で私からふたりにこの書き出しについて尋ねた。よしもとさんは、すんなりと確信的にそれを書いたということだった。ジョルジョにとっては、熟慮のすえの訳文だったようである。最初は、「思う」の訳語としてpensoをつけていたが、編集者と相談のうえそれを省くことにし、さらに語順を入れ替えて、不安感をあおるようにNon という否定辞から文を始めることにしたという。「ひとつの形容詞を訳すのに3日かけることもある」(ibid., p. 9)というジョルジョの苦労は、翻訳者のはしくれとして私にもよく理解できる。

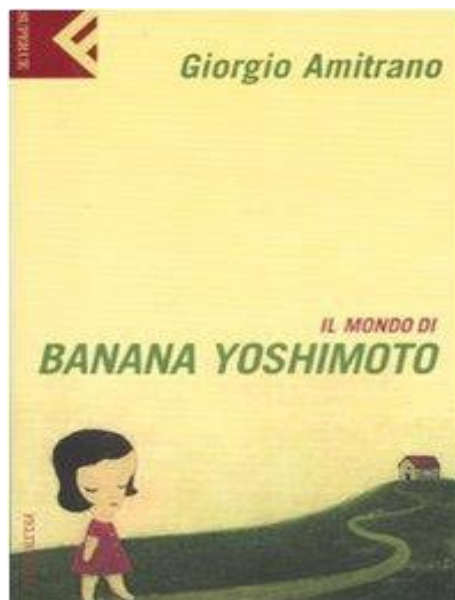
『木のぼり男爵』の著者、カルヴィーノと、よしもとばなな文学の共通点をあえて挙げれば、樹木とそれを包みこむ庭や森への畏敬の念ではないだろうか。たとえば、沖縄を舞台にした中短篇集『なんくるない』には、ガジュマルの生命力への畏怖が感じられる。最新のエッセイ『すばらしい日々』(幻冬舎)には、お父さんの吉本隆明氏の闘病や、お子さんへの思いがつつらられているが、私が最も印象に残ったのは、「びわ」と題された一文だ。「お子さんにどうぞ」と宅配便のおじさんからもらった3個のびわを食べたあと、よしもとさんが幼い息子といっしょに遊びながら種を蒔いたところ、5年後に大木に成長したそうだ。びわは木陰を作り、その分厚い葉は、お風呂に入れたり化粧水として使われるという。

実がほしいからなんとしてもがんばって実をつけろ！ と私が思って肥料をやりすぎたら、きっと根腐れしたかも。

だれもなんにもしていないのだ。ただびわを食べて、種をそのへんに捨てた。それだけのこと。

でもびわはこれまたなんにも考えずに、感謝しているわけでもなく、たくさんの葉を茂らせてすくすくと育ち、私にびわの葉の薬効の恵みをくれる(p. 62)。

なんにも世話をしないのにすくすくと育つびわ。そこに宿る、たくましくも、ちっともおしつけがましいところのない自然の力。万物、すなわち、人間や動物や植物が、本質的に一体だという法則を、自らが編纂した民話集に見出したカルヴィーノも、きっとこのびわをめぐる文章に大きな共感を示すことだろう。



【IL MONDO DI BANANA YOSHIKOMO 表紙】

[参考サイト]

<http://www.amazon.it/mondo-Banana-Yoshimoto-Giorgio-Amitrano/dp/8807840812>

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA

Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

イタリアそろばんの旅⑬

* イタリア人になりましたね *

木下 和真

イタリア滞在の四週間、私はヴェローナ中心部にあるキッチン付の宿に泊まっていた。コラードさんが「小さいけれど、伝統的でとても可愛い」と評する、雰囲気のある建物だ。初日の到着は深夜だったため、翌朝、大家さんに挨拶に行った。

大家さんは70歳くらいのおばあさん。第一印象はずばり、『魔法使い』だ。このあたり一帯の土地を所有しているらしく、見つめられると動けなくなってしまいそうな雰囲気がある。ヴェローナ方言の混じったイタリア語はまるで聞き取れない。どうすればいいのかわからないまま、思わず「宿代はいつ払えばいいのですか？」と聞いてしまった。

直後、後悔の念が襲った。大家さんは「今すぐで、OK」と言っているのだ。今すぐと言われても、「はいどうぞ」と払える金額ではない。一泊50ユーロ。27泊だと1350ユーロになる。

「明日コラードさんが来るから、その時に払う」私はそう言い残し、何かから逃れるかのように大家さんの部屋を後にした。

翌日、コラードさんの救いを待っていると、電話がかかってきた。「今日は遅くなるからアパートには行けません」

電話を切るや否や、妙な不安が襲ってきた。

昨日、大家さんに「宿泊費を払う」と言ったのが嘘になってしまう……

私は吸い寄せられるかのように、大家さんの部屋に向かい、こう口にした。

「昨日、宿泊費を払うと言ったので払います。いくらですか？」

大家さんは、そうかとばかり、カレンダーを見て日数を数える。

「日曜日までだから、28泊で1400ユーロだね」と返事が返ってきた。

日曜日まで？ 28泊？ 明らかにおかしい！ コラードさんにはちゃんと土曜日にヴェローナを発つと告げたはずだ。いつの間にか日曜日がチェックアウトになっている。帰国日を動かすことはもちろんできない！

「チェックアウトは土曜日です!!」

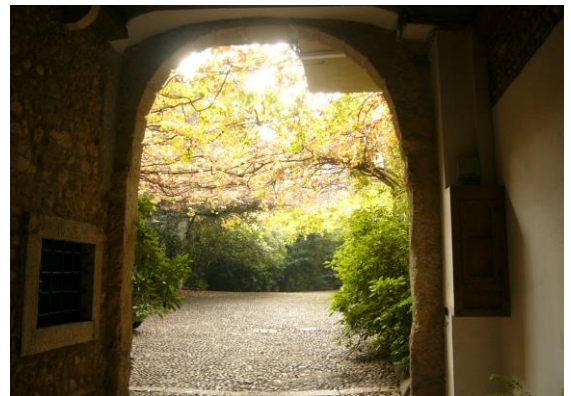
私は強く抗議した。すると、それ以上の調子で、

「Signor コラードがそういった。28日分を払わないとだめだ」

と言ってくる。この大家さんの凄味は半端ではない。人生の修羅場を潜り抜けてきた強さと頑固さを感じる。日本だったら絶対に折れないのだが、ここはイタリア。言いたいことが言えない。「明日、もう一度コラードさんに相談する」と言えばよかったのだが、昨日と同じになってしまう。四方から詰め寄られているような圧迫感を感じ、魔法使いにひれ伏すかのごとく、「Hocapito…」と全額を払ってしまった。そして、わずかばかりの理性を振絞り「ricevuta (領収書)」と口にした。

しかし、したたかなおばあ様、お金を受け取るや、とぼけたように世間話を始める。Ciao!! Buona giornata! とそのまま、立ち去れと言わんばかりの雰囲気だ。

私は「ricevuta!!」ともう一度詰め寄った。「あっそうか忘れていたわ」の言葉の後、やっとのことで領収書を書き始めた。私は奪うように紙を受け取り、二度目の魔女の館退散となった。



【宿の中庭】

次の日コラードさんに早速報告をした。する

と、いつもは柔和な表情のコラードさんの顔が一瞬にして陰しくなった。

「一日多く払ったのですか？」

「はい」

私は最小限の返事をする。

「私はきっちりチェックアウトは土曜日と言いました。」

「私も土曜日だと思っていたけど、おばさんが日曜日だって……」

私の言葉は語尾が小さくなっていく。

「なぜ、私に聞いてくれなかったのですか？」

「そうしようと思ったんだけど…… おばさんが……」

perché という言葉が、直接的に響く。

「今度、直接おばさんに話に行きます。おばさんは強い人です」

小さくなりながら、

「お願いします……」

と返事する。そして、そうだ。そうだ。魔女みたいだ！と心の中で叫ぶ。

「普通、お金を払うのはチェックアウトの時です。どうしてそんなに早く払ったのですか？」

「いつ払ったらいいのですかと聞いたら…… 今って……」

「日本人はやさしすぎます。イタリア人ならそんなことは言いません。」

だっておばさんが……

「デポジットは返してもらいましたか？」

「もらっていません……」

「ここは日本ではありません。気を付けなければいけません」

私はただただ小さくなっていた。

後日、コラードさんは大家さんと話を付けてくれることになった。私は部屋で話の決着を待っていた。二十分ほどするとコラードさんが戻ってきて、私に一泊分のお金を渡してくれた。

「お金を返してもらいました」

私が胸をなでおろしたのも束の間、コラードさんは続ける。

「そして、もう一つ問題があります。あなたは洗い物をすぐにしませんでしたね」

「……」

私は料理は好きだが、洗い物が嫌い。食器を洗わずにシンクにためておいたのだ。

「洗い物は別料金になります」

「別に洗ってと頼んでないのだけど……」

心の中では、勝手に洗ったくせにとつぶやく。

「置いておくとゴキブリの問題があります。使ったらすぐに洗ったほうがいい」

もつともだ。

「はい、そうします」

せつかく 50 ユーロを取り返してもらったのに、食器洗いの追加料金とは…… 請求額は 60 ユーロとのことだった。



【自作の Pasta】

一か月分の宿代を一気に払ったため、用意していたユーロ紙幣が底をついてしまった。現金が無いと何もできない。必要に迫られ近くの銀行へ向かった。二重扉の嚴重なセキュリティーを抜け、中に入る。「日本円を両替したいのですが……」と、恐る恐る尋ねるや否や、

「ここではできない。別の銀行に行け」

と返事が返ってきた。「どこの銀行に行けばいいか？」と質問すると、返事はこうだった。

「前の道をまっすぐ 500 メートル進み、信号を渡ってすぐのところ」

私は言われた通りの道を歩き、別の銀行に辿り着く。中に入って同じことを聞く。するとその行員は言った

「ここではやっていない。すぐ前の信号を渡り、右に 500 メートル進んだ銀行に行け」

さっきの銀行ではないか！！

「そこに行ったらここに行けと言われた」と反論すると、「とにかく、やってない！ ツーリストの両替屋に行け！！」と追い出されてしまった。

観光地の両替所は割がよくないと聞いていたが仕方がない。諦めて「ジュリエッタの家」近くの両替所へ向かった。

両替所には各国の国旗が描かれたボードがあり、レートが表示されている。日本の国旗の横には116円と書かれていた。当時のレートは107円。いいレートとはいえないが、背に腹は代えられない。わたしは二万円をだし、ユーロに変えてくれと言った。

すると窓口の女性が

「130ユーロ」

と言った。明らかにおかしい。即座に $20000 \div 116$ を計算する。そろばんの暗算力をなめてもらっては困る。答えは172ユーロあまり48円。130ユーロなんでもってのほかだ。正しい数字を主張すると、

「ちがう。手数料だという。」

手数料にしては法外な額だ。

『ここは日本ではありません』コラードさんの言葉がふっと頭をよぎった。また、負けるわけにはいかない。しかし、先に二万円を渡してしまったのが失敗だった。ガラス越しの女性は一向にその二万円を返そうとしない。

「私はクレジットカードを持っているので現金は必要ない。だから、現金を返してくれ!!」と主張した。すると、「140でどうだ」と言う。

「170ユーロ」私は譲らない。

「150」相手も譲歩する。これなら手数料とはいったいいくらなのだろう。

「170」「No. No.」を幾度も繰り返した挙句、らちが明かないのであきらめて「160」と言った。すると交渉は成立。すぐさま、書類が出される。そして「ここにサインしろ」と言う。

細かい字で何やら書かれているが、何も分からない。サインすると160で承諾したことになるのだろう。後で何を言っても文句が言われなような形になっているわけだ。仕方ないのでサインをしたが、すっきりしない。

後でコラードさんにそのことを話すと、

「彼らは法律をよく知っています」とのことだった。「私が立ち会えば銀行も両替してくれます」と言ってくれるのだが、コラードさんにお

んぶにだっこというわけにもいかない。



【旅行者両替所】

始まりがあれば終わりがある。四週間暮らした宿を去る時が来た。車で迎えに来てくれたコラードさんが私に尋ねた。

「お皿の別料金はどうなりましたか？」

数学者の頭の中にはひと月前の事柄がちゃんと記憶されている。

「昨日、チェックアウトはどうしたらいいのですかと聞いたら、『あなたはもうすべてのお金を払っているから何もする必要はありません』と言われました。」

そして、私はにやりとしながら続けた。

「『お皿の料金は払わなくていいのですか?』と喉まで出かかったけれど何も言いませんでした」

すると、コラードさんはこう言った。

「そうですか。それはよかった。あなたは一か月で少しイタリア人になりましたね」

私は大きな荷物を引きずり、宿を後にした。

(当館語学受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>